

二世紀の教会指導者テルトゥリアヌスは次のような言葉を残しています。「世の人々はクリスチャンを見て『なんと彼らは互いに愛し合っていることか』と言って褒め、自分たちが悪口を言い合っているのを恥じている。」この時代、キリストを信じることは命がけでした。それにもかかわらず多くの人が“隣人愛”に心を動かされ教会へやって来たのです。そしてキリスト教はローマ帝国中に広がり、ついには国教になりました。人々は隣人愛の“報いを求めない愛”にまことの神を感じたのです。

なぜ人々はそう感じたのでしょうか。キリスト教は愛の宗教だと言われていますが、その根本は「神は愛なり」という教えにあります。使徒ヨハネは晩年、老衰で説教ができなくなりました。すると「神は愛なり」という言葉をいつも繰り返していたそうです。宇宙の全てを創造された全能の神は、気まぐれな神でも無慈悲な神でもありません。私たちを温かく見守ってくださる愛の神なのです。これを踏まえないとイエス・キリストの十字架の愛も隣人愛もわかりません。神は愛だからこそ、神にかたどって造られている私たち人間は、愛によって人間らしく生きられるのです。ただしこの愛を誤解してはなりません。“愛”という恋愛を思い浮かべる人がたくさんいます。でも神の愛は、ギリシャ語でアガペーと呼ばれる“無償の愛”です。恋愛のように惚れるとか、好きになるということは含まれません。嫌いな人でも愛する愛なのです。だから日本語に訳す時は“報いを求めない善意”と訳した方が良くかもしれません。

「互いに愛し合いなさい」という教えは、イエスさまが新しい戒めとして教えられたものです。弟子たちに語られた時、イエスさまは「わたしがあなたがたを愛したように」という言葉を付け加えられました。だから、これは厳密には「イエスさまが愛されたように互いに愛し合う」教えなのです。その時、イエスさまは弟子たち一人一人の足を洗われました。ここにこの教えの意味がよく表されています。これは隣人の罪や穢れ、苦しみと悲しみを担い合うことに他なりません。その究極が十字架の愛です。このように隣人愛の意味

が、より明確にされているところが“新しい”と言えます。

イエスさまは父なる神の御心に忠実に従い、愛と正義をまっとうされました。その中でユダヤの権力者たちの聖書解釈の間違いを指摘されたのです。彼らは富と権力に執着し、既得権益を守るために自分たちに都合よく聖書を解釈していました。そして貧しい人たちから搾取していたのです。それとは逆にイエスさまは貧しい人々を助け、病人を癒し、苦難の中にある人々を救われました。だからイエスさまの評判は高まっていったのです。それを知った権力者たちは自分たちの立場が脅かされると思い、イエスさまの命を狙うようになります。そして最終的に十字架にかけました。つまりイエスさまは、ご自分の命を顧みず、人々への愛を貫かれたからこそ。十字架にかけられたのです。だから十字架にはイエスさまの愛が込められています。そしてこの徹底した自己犠牲に神さまのお姿が現れているのです。この神の愛には、人間の魂を罪から浄め、永遠の命を与え、復活させる力があると聖書は教えています。でもこれは不思議な話です。それで多くの人は、こんな教えは、ばからしくて非科学的だと言います。特に復活についてはそうです。2

それなら、この不条理の世の中で理不尽にも命を落とした多くの人たちのことを考えてみてください。十五年前に東日本大震災が起こり、一昨年は能登半島地震が起こりました。これらの震災でとても多くの尊い命が奪われています。そしてウクライナやガザでは人が殺され続けているのです。地震や戦争で破壊された地域はいずれ復興するでしょう。でも命を奪われた人たちは帰って来ないのです。しかし愛なる神は、そのままにはしておかれません。聖書はそう言っているのです。必ず命を回復してください。奪われた人生を取り戻してくださいのです。その約束の“しるし”としてイエスさまは復活されました。だから復活を信じることは、神の愛を信じることであります。

どんな人の命も尊いものです。だから全ての人が死で終わることはありません。それが復活の命なのです。神さまに愛されていない人など一人もいません。神の愛を命に受けているからこそ、人は誰かを愛することができ、良心があります。このことは鏡のように心の中に“愛である神”を映し出していると言い換え

ることができるとしよう。なぜなら人間は神の似姿として造られたからです。

でも私たちの心の中には不純な思いが湧き上ってくる性質があります。傲慢、強欲、妬み、憎しみ、怒りなど聖書が“罪”と呼んでいる心の毒です。それがこの心の鏡を曇らせているのです。心の毒は、そのままにしておくと社会に浸透して広がり、人々の活力を削いでいきます。今の日本は金もうけ主義の競争社会であり、心の毒が蔓延しています。熾烈な競争社会のアメリカでは格差が広がり、国民の分断が深刻になっていますが、日本もそれに続く状況です。その中で競争に勝った者だけが価値ある人間とされています。淘汰され、優秀な人の遺伝子が生き残り、さらに競争によって厳選されていくことが“進化”だとする価値観が、多くの人の意識の奥に入り込んでいるのです。それが「LGBTQは生産性がない」というような発言になって表れます。こういう考えを突き詰めると優生思想になります。これはヒトラーなどファシズムの考え方です。

聖書の教えはこれとは真逆です。全ての人間は平等であり、みんな神に愛され、神にかたどって造られ、いと述べています。これは姿かたちではなく、魂が神にかたどって造られているという意味です。能力や出身に関係なく、みんな等しく尊いのです。神にかたどって造られていることを、“神の似姿”と言いますが、ここに全ての人が生まれながらに持っている人権の根拠があります。でも、これは科学的に証明できるものではありません。真理ですが、神秘でもあります。

科学的に人間の“価値”を判断しようとする、一人一人の能力を測定することになります、すると、その数値を根拠に上等な人間、中くらいの人間、下等な人間と分けることになるのです。こういうものが社会で固定化されると階級になります。そこには特権はあっても人権はありません。そんな社会でみんな幸せでしょうか。それはあり得ません。過去の歴史がそれを証明しています。つまり科学的で合理的な考え方が常に私たちを幸せにするとは限らないのです。世界の歴史は、聖書に啓示されているように「すべての人は平等で尊く人権がある」という方向に進んできました。国連憲章や世界人権宣言にそれが示されています。

日本国憲法も基本的人権を保障しています。なぜなら、「神は愛なり」という真実が人々の心に働きかけ歴史を導いているからです。

歴史を振り返りますと、社会に力を与え良くなってきたのは、利益を求めない善意であったことがわかります。第二次世界大戦後の日本は高度経済成長を成し遂げました。その要因の一つとして、たくさんの方の便利な新しい製品が次々に生み出されていったことがあげられます。その多くは、利益に固執せず、自分の身を削ってでも世の中に役立つものを造りたいと願う善意の人々によって生み出されました。現代は何かも利益が優先され、報いを求めない善意の心が無いがしろにされています。しかし善意の誠実な心が私たちの社会に活力を与えるのです。

報いを求めない愛は、初期の教会の伝道の力でもあったことを最初にお話しました。しかしテルトゥリアヌスの時代から約二百年後、キリスト教がローマの国教になっていく頃には、まったく様子が変わっていました。当時の教会の指導者のクリュソストモスは、「クリスチャンは奇跡を求めているだけで愛がない」と言っていています。でもこれは遠い昔の話ではありません。油断していると今でもあり得る話なのです。奇跡も、癒しも、祝福も愛がなければ与えられません。「神は愛なり」という言葉の意味を魂に刻みつけたいと思います。